

眞 生

第 八 卷 七 月 號

□世の中にはよくまゝならぬと云つて此の世をかつ人が可なりが多い。乍然それは此の世がまゝならぬと云つて、たゞ自らにくやむのではないか。

□或る人が此の世はまゝならぬ世界と思へ、そすれば一切が安穩である云々たるほゞ此の世もかくまでにあきらむれば大したものだ。それでは何等の不平も起らぬであらう。否起りやうがないからだ。

□乍然それでは此の世には何一つ眞に望みと云ふものはなくなるであらう。人は此の世はまゝならぬ世界である、だから何事も辛抱して暮せと云つた。乍然それも亦可笑話でないか。

□友よ、此の世は果して、そんなにまゝならぬ世界であらうか、そしてまた、此の世は果してそんなに辛抱して暮さればならない處であらうか。自分はむしろ此の世ほど實にまゝになる世界はないかと思ふ。

□それは自らがまゝならぬことをするからではないか、そしてまた、それは自らがまゝならぬことを此の世に願ふからではないか。此の世には天地自然の大道があるのだ。而て此の道によるものは皆一としてならぬものさではない。

□されば友よ、世のまゝならぬと云ふ人は恐らくは此の道に自らよらないでゐるからではないか。されば眞實の道に着け、そこには必ず行くとして可ならざるものはない。一切が自由だ、總てが楽しみだ、而てそこが即ち天國だ、極樂だまた涅槃の世界なのだ。（念）

禮拜儀

目次

禮拜儀	
首無し	
淨土教の特質	土屋觀道
阿那律の得果	中村辨康
荒削り	土屋觀道
吾朋便り	

辨榮上人の禮拜儀に

「聖者の心宮に在ませし如く、我等が心殿にも在らせ給へ」

と云ふ言葉がある。

乍然之は單に上人御一人の祈りの言葉ではないのだ。

此の上人の一人の祈りは、またそのまゝ、私共各人の祈りそのまゝでなくてはならぬ。

然ば友よ、私達は何をおいても先づ自らに、此の祈りの心として、如來の靈應を各人の心殿に宿すべきではないか。

如來を心殿に宿すとは自の心の中に常に如來を念じて止まないことだ。如來を念すれば如來は常に我を離れず、念に従つて常に各人の心殿に宿し給ふからである。

而も、如來を私達の心殿に宿せんことは一体何が爲めであらうか。それは云ふまでもなく、諸の聖者の如く、一切の各自の苦惱を脱して、眞實に生きんが爲めに外ならぬ。いはゞ聖者の生活を各人の上にも顯はさんが爲めである。

然に近頃の人々を見るに、口こそ此の禮拜儀を誦すれ、その多くはたゞ口のみにして、眞に之を行はんとする人がないやうだ。之では眞實の禮拜儀とは云へぬではないか。従つて、それらの人々に如來の靈應の宿しないのも又無理からぬことである。

世に似て非なるものと云ふことがあるが、世に之ほど似て非なるものは無い。

(念)

首無し

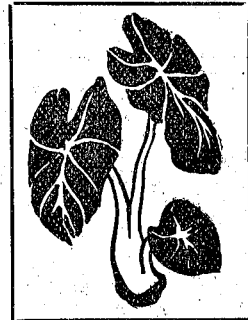
□ 猫が紙袋を被つたやうに、皆何かを被つて困つてゐます。

□ 商賣を被つて、忙しい、信仰の集りへも出て來れぬと云つて騒いで居ます。そんな忙しい商賣なら止めて了ふがよい。二萬や三萬儲けたつて、それがどれ程の事ですか、同じ日本の國內で、他人の懐の中にある金が自分の懐中へ動いて來た丈で、大した効用もして居らぬ場合があります。よし大した財の動きをしてゐるにしても、金に喰つて廻つてゐるだけなら、金の運搬人、金の巾着に生れて來たのです。もう少し「人間」といふ者になつてみたい。

□ 田地の苦勞、着物の苦勞、子供の苦勞、鶏の苦勞、おヒゲの苦勞、博士論文の苦勞から、雨漏りの苦勞まで、さても苦勞の多いこと哉。皆自分に蒔いて、自分に困つてゐます。いやこれでは一体「自分」といふものがどこにあるのでせう。たゞ紙袋ばかりがあつて、猫の姿がない、姿が無しでたゞ紙袋ばかりが動いてゐます。「首無し」といひますが、首無しどころか胴までなくて、たゞ田地ばかりが動いてゐます、商賣だけが動いてゐます。工場を使つてゐるのでなくて工場に使はれてゐます。金を使つてゐるのでなくて金に使はれてゐます。規定を使つてゐるのでなく規定に使はれてゐます。本當に確りせぬと「一生」は何にもしに出て來たのかわかりません。

□ ウツカリするを使はれに出て來たのです。縛ばられに出て來たのです。困りに出て來たのです。然し使はれに出て來たのもよろしい、本當に「使はれ」て、使はれることが「使命」になり、心から「使はれ」てゆくのなら結構です。働くのも結構、働いてすつかり自分が動力になり、機械になり切つて、どんなツマラン事にも愚痴も出ず、悦んで働けたら結構です。「自分」が「働き」になつてゐるからです。自分が使はれになり、自分が商賣になり、自分が鶏飼ひになり、自分が旗振りになり、自分が規則になり、規則に縛られず、自分が金持になつて金に引擦られず、自分が借家持になつて借家に煩はれず、自分が田地持になつて田地に使はれず、自分が總てを引き廻はし、自分が總てを生かしてゆくのなら結構です。

□ それなら、自分が先づ活きて、商賣を活かし、召使を活かし、道具を活かし、權限を活かし、技術を活かしてゐるのだから本當だが、さもなく、家財道具があつて自己がなく、自分が番人になつてゐるのなら、自己の死であります。信仰とは、自分が先づ活きることであります、如來様の大生命大神を己れとして己れが活き、己れが「主」となり、一切を「従」となし、自分が總てを率ひて他と一つになり、無理なくスラ／＼と一切を創造し、無限に發展してゆくことであります、それが無量壽であり、無量光であります。(梶子)



浄土教の特質

土屋 觀道

ここに浄土教の特質を申しますが、一体浄土教にも色々の派があつて、詳かくいへば其の派の立て方によつて、可なり其の信仰の内容と形式とを異にするものがあります。だから、今私は之を主として法然上人の浄土教と云ふ立場から見、少しく其の浄土教の特質を述べて見たいと思ふのであります。

それについて、先づ浄土教が佛教であり、佛教の中でも小乗教にあらずして、大乘教であること云ふことは浄土教を知る人の前以つて承知して置いて置かねばならぬところであります。何となれば佛教には佛教特有の宇宙觀があり、人生觀があつて、他の宗教と全く異つた點があると同時に、又大乗教には大乘教として他の小乗教一般には無い所の大乗教としての特有な性質を持つてゐるからであります。

乍然今はさうした詳しいことを前置きをして述べる暇がありませんから、讀者は一應そのことは御存じのこととして之を述ぶるのであります。

二、教判

ところで、一体釋尊の佛教は單に佛教と申しましても釋尊當時の佛數と三千年後の今日の佛教とは可なり其の思想變遷の程度を異にしてゐるのであります。古來支那に於ては釋尊一代の佛教を自分の宗旨によつて種々に分別して之に系統つけたものであります。此の浄土教徒にも此の分け方をしたものがあります。之を浄土の教判と云ひますが、浄土教では釋尊一代の佛教を判じて、聖道門と浄土門との二つに別けるのであります。ここに門と云ふは入口と云ふ意味であります。即ち佛教の理想は何れも同じく究竟涅槃にありますが、その涅槃に入るに聖道門的方法と浄土門的方法の二つがあると云ふのであります。而て此の二つの分け方は特に浄土教から見た分け方で他の宗では必ずしも認むるものではありません。

然に今や此の教判が殆ど一切佛教の上に認められるの有様となり、而も一切の聖道門を向ふに回して悉く之を選捨て、獨り自ら浄土門を建立して、そこに一宗を爲したと云ふことは佛教史上の大偉觀であります。

聖道門とは四諦十二因縁、八聖道を中心として、三學を修するのでありますから、所謂聖者の修行する道として、所謂自分の力で修行して解脱のできる道と云ふ意味であります。然に浄土門とは之に反して、自らの修行によつて解脱することのできない劣機の凡夫が阿彌陀佛の浄土に往生して、彼の土で解脱して成佛するの教であつて、先づ浄土に到るのを近き目的とするが故に之を往生浄土の門と云ふ意から來た名目であります。

三、自力と他力

然に今までの聖道門は主として、自分の力によつて、煩悶を斷じて解脱を得、六度を滿行して佛たらんとしたのでありますが、此の浄土門にあつては全く之に反して、自力を棄て、彌陀の他力を頼

み、煩悶を斷せずして往生を願ひ、六度滿行せずして佛とならうとしたのであります。いはゞ自力の法門を捨て、全く他力の法門によることとなつたのであります。

乍然之は佛教發達史の上から云へば大乘教よりも小乗教が先きであり、淨土教よりも聖道門が先に出了たのでありますが、其の精神的方面から見ますれば小乗教の行きづまりを大乘教が展開し、聖道門の行きづまりを淨土教が開いたとも見る事ができるのであります。

従つて、其の結果は佛教界の一大革命でありまして、貴族佛教が平民佛教となり、特種佛教が普邊佛教となつた觀があります。而も聖道門によつて、修道止まず、精進努力して、三學を成就しやうとしたものも、其の修行ができないうで行きつまつたもの、若しくは自分の生活のあまりにあさましくして、初めから成佛の望みさへ絶えてゐたものまでが、此の淨土門の展開によつて、始めて甦つたのであります。徒つて今までは機根つたなくして、全く佛縁なしとさへ云はれたものが今や反つて如來の本願に目醒めさせられて、最も深き佛縁の衆生とせらるゝに至つたのであります。

四、凡入報土

之を凡入報土と云ひます。而て、之は特に淨土教の特質として其の最も重要な點でありまして、之こそ從來の佛教に對する一大革命ののろしとも云ふべきものであります。何となれば今までの佛教と云へども、大乘教に於ては衆生の成佛を許し、衆生の悉具佛性を云はないではなく、又常に之を高調したのでありますが、乍然その實際では其の修行の方法が難くして、殆ど一人として之を得るものなく、機根つたなきものには全くそれが行きつまつたのに、之を悉く根本より打破して、いかなる罪深きものも、愚かなる者も、皆悉く念佛の一行によつて、たやすく彌陀の淨土に往生ができることを明にしたことは全く今までにない一大宗教の革正であるからでもあります。

言かゆれば一切の衆生が之によつて、初めて解脱の望みを叶え、又之によつて、初めて前途に眞

人の生活としての救ひの光を見ることができたからであります。

五、大悲の本願

乍然その中にも、最も人の心を動かししたのは如來の本願であります。此の本願は如來の大悲として自然に起つて來ざるを得ないものではあります。自らの力によつて解脱のできない多くの人々には之ほど大きな力つよい力ではないのであります。一切の不安も之によつて救はれ、一切の望みも之によつて立つことができるのであります。而も此の一點こそは實に淨土教の淨土教たる一大特色であるのであります。

尤も佛の本願は他の佛にもないことはありません。乍然かくの如きの衆生救済としての佛の本願は此の淨土教に至つて初めて完成せられたと云ふ感があるのであります。

六、西方の淨土

更に淨土教では十方に淨土を認め乍ら、而も之を捨て、西方を願ふのであります。それはもとより彌陀の淨土であるからである。従つて西方と云ふはたゞ彌陀の淨土と云ふ意味であつて、必ずしも西方と執する必要はないのであります。法然上人は法語の中に「十方に淨土多けれど西方を願ふは十惡五逆の衆生の生るゝ故なり」と云はれてあります。十惡五逆の衆生の生るゝと云ふことは十惡五逆の衆生も生るゝことのできると云ふ意味であつて、必ずしも十惡五逆のものでなくてはならぬと云ふ意味ではないのであります。従つて、その意味はいかなる罪深い人でもと云ふことであつて、即ち一面には如來の大悲をさし、更に一面にはだがら我等如きの凡夫も必ず往生ができるにちがいないの自らの信仰の決心を明に示すものであります。いはゞ淨土の選擇とも云つてよいのであります。

七、彌陀一佛

更に淨土教が諸佛を捨て、彌陀一佛に歸するところも亦淨土教の一大特色であります。之また從來

にはあまりない例でありまして、況んや諸佛を捨て、彌陀一佛と執するところ、むしろ佛教としての異例であります。而もそれがまだ、ともすれば散漫ならんとする人心を集中して、彌陀一佛に歸するところ、宗教信仰の進歩としても、實に一步を進めたものと云つてよいのであります。そして、法然上人は此のことを「諸佛の中に彌陀に歸し奉るは三念五念に至るまで自ら來迎し給ふ故なり」と其の理由を明に示してゐられます。之は亦いかに上人が如來の來迎を喜び、之を信すること深うして、自分の前途にかばかりの安心を得られたかは思い見るさへ喜びであります。

八、本願念佛

更に諸行と念佛の關係も上人は「諸行の中に念佛を用ゆるは彼の佛の本願なる故なり」と、其の念佛を諸行の中から選擇せられてゐる。いかにして淨土に往生するかと云ふことは如來の大悲を信じ凡人報土を願ふ者には自然に起つて來る當然の問題ではあるが、然はその淨土に到るべき方法は三學の外に何があらうかと之一に萬行につかれたる多くの衆生の衷心から聞かんとするところでありませう。そして其の結果として發見せられたのが即ち本願の念佛であります。

世には佛教の眞理を知らないが故に、否むしろ佛教の眞理として多くの聖道教を知れるが故に、念佛位で之を輕しむるのが常でありました。之主として、聖道門の自力教の盛大であつた爲めに永く此の教へが社會に出る機會が無かつたのであります。遂に唐の善導に至つてその理が明にせられるに至つたのであります。それは「彼の佛の本願なる故なり」と上人が言はれるやうに、全く本願を信する信仰の一點によつて之が持たれたのであります。而も法然上人は念佛を以て更に勝易の行であると言はれております。勝とは最勝の意味で念佛は稱名であり、稱名は南無阿彌陀佛であり、佛名は他の諸行の名に比して萬德總持の名號であると云ふのであります。而て名號は之を稱するに最も易いと云ふ上から之を最易の行と云ふのであります。而て此の稱名の念佛が果して他の聖道の六度萬行にも

勝るかは更に考究を要する點でありますが、一度之を以て彌陀の本願であるが故に信する人にはそれらは已に問題ではないのであります。従つて今までの多くの聖道門的難行の人々が沛然として之に向つて來たのも無理からぬことであります。而て彼の萬行のすべてに代つて此の念佛の一行で彼の淨土に往生を願ふと云ふことは之また淨土教の彼の聖道門に對する一大特異の點であります。

九、彼土往生

之も亦此の土で解脱ができないので、彌陀の淨土に往生しやうと云ふ限り、淨土が此の土でなくして、彼土（又は彼岸）であるべきはもとよりであります。乍然之は必ずしも死後の淨土として未來に置くべき要はありますまい。古來、ともすれば彌陀の淨土を多くは未來に置き肉身が滅せねば行かれぬところかの如くに置き、死後の往生をのみ願ふの傾きがあるが、之は更に考究を要すべき點であります。否、若し一步を譲つて、淨土を彼岸として、未來に置き死後に往生を遂るものと許すとも、如來の大悲は已に彼の土から此の土を照して止まぬのでありますから、むしろその光に浴して此の土から如來の慈光に照されて眞人の生活をするには何の障りもないのであります。

一〇、光明主義

之は古來から今も尙稱へられてゐるところであります。此の世を諸行無常と云い、此の土を娑婆と云ひ、苦の世界と云ひ非常に厭ふべき世界であると教へられて來た爲めに、世間の多くは此の淨土の教を誤解して、此の世から如來の慈光に生き活きて行くことの道理を充分に知ることができなかつたのであります。乍然如來の慈光は十方に照耀して諸佛の國土に到らぬことはないものであります。念佛の衆生はこゝにゐながらその光を蒙ることができるのであります。而も此の光明の中にあつて此の世から生きて行くのが辨榮上人の主張される光明主義なのであります。だから娑婆を厭ふと云ふことは貪瞋痴の三毒の生活を厭ふと云ふことで必ずしも此の世を厭ふと云ふことではないのであります。

す。

一一、眞生主義

終りに臨んで、私共の眞生主義についても一言して置きたいと思ふのであります。それは此の如來の大悲の中に此の世から包まれて、而もその中から此の世に於て、眞實に生きて行かうとする運動である云ふことであります。その點に於て、從來の淨土教は主として未來主義でありました。而もそれの爲めに此の世の生活を輕んじて、むしろ此の世を娑婆界として、厭ふ傾向さへ多かつたのであります。之に對して其の誤まれるを訂して、此の世から如來の慈光の中に一生を樂しく送らうとするのが光明主義であります。

然に近頃の多くの光明主義者を見るに、否已に此の傾向は已に辨榮上人の當時からして、誤り傳へられやうとした傾きはあつたのであります。たゞ如來の光明の中に遊び暮さうとする人の多いことです。然に眞實の宗教は決して遊ばんが爲めの宗教ではありません、そしてまた、それでは人生の眞意義はないのであります。而て此の點に注意して眞實の佛教は眞に生るの宗教として、此の世から永劫に價値に生ることを主張するのが私共の宗教であります。從て、眞實の淨土教は此の現に輝く如來大悲の慈光のもとに、限りなき喜びと望みと力との生活を以つて此の世から眞に生きて往くと云ふのでなくてはならぬとするのが私共の眞生主義であるのであります。(四、七、三)

唐澤念佛

三昧會に

就て

期日 七月二十二日より七日間、二十九日朝下山のこと
注意 一、成可く前日中に御登山のこと 二、御参加の方は四五日前に前以つて眞

生社へ御一報下さい 三、今年は一層念佛を中心として精進のこと
唐澤では宮澤老上人及び御弟子の説認師が御病氣で御二人とも御他界になりましたので、目下無住であります。だから正願寺様に御世話をお願い、上諏訪の山田、安藤、藤森の道友の御三方が主として御靈力下さつてゐます。だからそれらの準備の爲め前置き一報願上ます

阿那律の得果

中 村 辨 康

行詰りを切り開く事は

行詰らざる道に轉入する事である

釋迦種族の中に生れ而して人々より牟尼の覺者よ、應供者よ、世尊よと尊ばれたゴータマ、シツダルタの教團の中に阿那律と云ふ沙門があつた。

彼れは師のゴータマとは從兄弟の間柄で甘露飯王の愛兒であつたが、釋尊の教團の中でも天眼第一の稱を持つて居た程傑出して居た阿羅漢の一人であり十大弟子若しくは十六大弟子の一人でもあつた。

然し誰でも沙彌から長老になれない如く彼れも初めの間は平凡な人であつた。昨日迄は武家豪族の貴公子として華やかな生活をして居つたものが今は質素な教團の修行者として食も自ら乞ひ歩るかねばならなかつたし着物も自ら縫はねばならなかつた。随つて眞剣な氣分にならふとしても身体の勞れやら馴れない仕事の爲めにツイ横着な心も出て來るのであつた。

或時こんな事があつた。

給孤獨と呼ばれた長者の須達多がブラセーナジツト王の舍衛城内に祇陀太子の協力に依りすばらしい精舎を建

設して教團の人々に献じたあの有名な祇園に釋尊が多く

の兄弟達と一處に居られた時の事である。

教團の日課として朝の托鉢と訪問とが終り晝の御齋食後の小憩もすみ三時間の睡眠と一時間の散歩と而して一時間の靜座とが一と通り終つた後、人々は講堂に集つて二時間の談話を交はすのであつた。夫れは主として其日の出來事に就いての語り合ひであり而して誰れかの提出した疑問に就ての意見の交換であつた。

大概人々の議論の盡きた頃に師の佛陀が其集り中に加はつて問題になつて居る諸件に就て親切な解決を與へて下さるのであつた。夫れも十時迄にはスツカリ切り上げて仕舞ふ習慣であつた。つまり十時からは各々一人一人になつてセキ一つしない眞剣な靜慮に入らねばならぬからである。

其釋尊のお話しの時であつた。

阿那律は勞れが出たのか頗りに居眠りをして居つた。

釋尊は之を見られると靜かに而して嚴かに

「阿那律よ」

と呼びかけられた。

阿那律はびつくりして

「師よ。何でありますか。」

と御答へ申し上げると釋尊は

「御前は王法を脱れ様として出家したか。」

と御尋ねになつた。

「イエ、決してさうではありません。私は生老病死を畏るゝ故に、其解脱の法を求めて出家したので御座います。」

「さうか。それならばなぜ説法の處で眠るのか。私には放逸懈怠の行爲としか見えない。も少し眞剣にならねば道を成就する事は出来ないぞ。」

と何時になくひどく御叱かりになられたのであつた。

其時阿那律は大鐵槌で頭をガーンとやられた様な大きなショックを受けたので、思はず立ち上つて世尊に向ひ禮拜をして。

「誠に慚愧に堪えない事があります。今後はたゞ此身が爛れる様な事がありませうとも決して師よ。あなたの御前では眠ると云ふ事を致しますまい。師よ。悪う御座いました。どうぞ御ゆるし下さいませ様に。」

と誓はれるのであつた。

而して夫れから七日間と云ふものはさうしても眠る事が出来なかつたので終には目が見えない様になつて仕舞

つた。然し是れ以后阿那律の人格は一變して非常に敬虔な人になつた。

幾日かの後彼は彼の部屋で獨り装束の繕ひをして居つたがさうしたはづみか縫針が飛んで見えなくなつた。暫く手さぐりでやつて居つたがさうしても見つからないのであつた。そこで

「ごなたか功德を好む御方が御在でならば私の爲めに針を拾つて下さいませんせうか。」

とあてもなく聲をかけるゝ釋尊の御聲で

「此處に功德を好む者が居る。さあ拾つて上げる。」

と阿那律の手の上に針をのせられた。

阿那律は

「オ、師よ。あなたで御座いましたか。然し師よ。あなたは一切の功德をお持ち給ふ御方であるのに尚ほ其上にも功德を望み給ふのでありますか。」

と御尋ねした。すると釋尊は

「阿那律よ。私は功德を好むに飽くと云ふ事を知らない者だ。」

と仰せられた。

「アア師よ。有り難う御座います。」

と思はず阿那律が禮拜するとフツト眼が見え出した。

然かも天眼と云ふ一切の者の善所美處を見得る眼となつ

た。夫れ以來天眼第一の譽れを得る様になつたのである。

此れ程迄に信仰深く人格貫き者であつた彼も、自分自らを靜に深く反省して見ると、自分がまだ本當に解脱した者でない事が痛切に思はれてならなかつた。

そこで或日の事、教團の中でも上首として尊敬せられて居る舍利弗尊者を訪問したのである。

「我が友 舍利弗よ。私は人間としての肉眼に超えた清い天眼を以てあらゆる世界を見渡す事が出来ます。而して私の精進は不屈不撓であり、私の樹立した正念は不動であります。又た身体は寂かに暢かで動搖しませんし心は一点に集中していつも靜まつて居ります。けれどもさう云ふものでせうか、私の心は御恥かしい事です。がまだ執着が離れません。而して色々な煩惱から抜け出る事が出来ません。友よ。恐れ入りましたが私の爲めに其原因を明らかにして下さいませんせうか。」

と眞心を込めて懇ろに御尋ねするのであつた。

舍利弗は其聰明なすき透る様な目をふさいで、阿那律の言葉をジツと聞いて居つたが、やがて、

「我が友 阿那律よ。あなたが『私は人間の眼に超えた清淨な天眼であらゆる世界を見渡す事が出来る』と思つて居られるのは慢心と云ふ惡魔があなたの心を禍

ひして居るからです。又た『私の精進は不屈不撓で私の正念は不動で身体は寂かに暢かで動搖がなく心はいつとも一点に集中して靜つて居る』と云はれるのはあなたにまだ掉舉が残つて居るからだと思ひます。そして『それにも拘らず私の心は執着が離れず諸漏から脱れる事が出来ない』と思はれて居るのはあなたの愚痴から出る悔みではないでせうか。

です。から此の慢心と掉舉と悔との三法を離れて又た此三法を思はず唯だ眞實の生活に向つてのみあなたの心を運ばれるならばあなたの行詰りは屹度なくなる事と存じます。」

と叡智其物の如き斷案を下したのであつた。

此處に於て阿那律は夢の覺めた様な黎明を感じ眞實の喜びに自分の心を確信の道へ三振り向けた。

而して「俺は清い眼で世間を見る事が出来る。」と云ふやうな慢心や「俺は精進であり俺の信仰は不動であり身は莊重に心は靜かである」と考へる様な心の掉舉や「俺はこんなであるに拘らず執着を離れず煩惱から抜け出ることが出来ない」と尊大な心から其結果を豫想してかなしむ悔やの此の三つを離れて此三つを心に思ひ浮べる事もなくひたすら此の一息一息を眞生の爲めにさへげたのである。

かくて彼には彼れとしての求めが無くなり、而して願ひがなくなつた、彼れ自身の願求がなくなると共に一切の未信の人々を此の無願の道へ誘はすには居られない衝動に燃え立つた。

而して彼は無生の生と無死の死とを此の日常生活の中に實現實証しつゝ大阿羅漢として一切の人々から供養を

荒削り

土屋 觀道

或る人が私の話を批評して

「土屋の話は荒削りの話である。だから初めての人にはあれでもよいが、仕上にはあれではいかぬ、それには〇〇上人の話に限る」と云つたと言ふことである。そして其の人はもと私のもとにゐて話を聞いた人であるが、今は〇〇上人のもとにゐて話を聞いてゐると云ふことである。

私はその人が誰であるかを知らない。乍然或る人から此の話を聞いたとき、私は非常に心を痛めた。そして、若しそれが本當ならば私はその人の爲めにその誤つてゐ

受くる事の出来る人となつた。

行詰りは脱せんとあせればあせる程益々行詰りの闇の中に入るものである。

然し夫れは唯だ行詰らざる眞生の大道へ轉入すれば何でもない事なのである。

ることを知らせねばならぬと思つた。何となればその人は私の話を非常に誤解して聞いてゐるからである。乍然之を以つて之を見れば世にはかうした誤りの人もまだ他にないとは限らぬ。従つて私が此の折りを機會として、かうした誤りの人々に少しく私の所感を述べることは必ずしも無駄ではあるまい。

友よ、私の話が荒削りであるとはこの点を云はれるのか、私は嘗て〇〇上人の話も聞いた、そしてまた此の頃その上人の話されたと云ふ筆録も見た。乍然それは少くとも私の聞いたところ、見たところの範圍では其の上人の話は私の話に比べて決して勝れてゐるとは思へない。

否、勝れてゐないのみでなく、それは遙に私共の信仰より劣つたものだと思ふ感じさへ私にはしたのであつた。諸君にはその話が色々の小さい事まで詳しく説かれ、やさしく語られ、一見それが爲めに非常に判り易くて本當の宗教かの如くにも見えるのであらう。乍然それは已に古い古い昔の形に過ぎないのだ。少くとも今日の現代の青年には決して受け入れらるべくもない教へであつた。そうして私から云はすればそれはもう今日の宗教ではないのだ。たゞ昔のまゝの死せる傳統、死せる舊き思想としてならばそれでもよい。否それの方が聞きよいのだ。従つて、古い頭の持ち主や、昔風な暇人の宗教、働かなくて遊んで食ふやうな老人、或は昔風な地主、金持、資本家と云つた閑人や、頭の鈍い古い女たちにはそれが受けるのだ。

乍然今後の宗教、新しき生ける眞人の生活にはさうした思想や、宗教はもうむかないのだ。友よ、心して自らの生活に自らの心とを反省せよ、恐くは思ひ半に過ぐるものがあるであらう。

私の話はいかうした人々には判らない、否判つても信じられないのだ。否判れば判るほど、それが自分の生活と衝突するので苦いのだ。だから私の話は自らの生活を本當に改めない限り、それはさうしても信ずることができ

ぬのだ。然に〇〇上人のお話にはそれが無い。従つて、其の話は生活の改造を要しない。むしろそのまゝの今日の生活を喜びとし、仕合として暮せるやうに説れるのだ。従つて、諸君の生活と〇〇上人のお話とはそこに何等の衝突がない。そこで生活の苦しみがない、いつもこのまゝで喜べるのだ。而もその話がよくよく反省して聞かない限り、丁度それにあてはまるべく生活を學理づけ、論理づけして、何となく有難く説かれるので、諸君が現代の大勢を知らず又佛教の本質を知らずして之を聞けばあまきに蟻のつくやうに、諸君は知らず知らずそれに引き入れられるのも無理がないのだ。

乍然友よ、それは大なる誤りである。だから私の話はさうした人の誤りを根本から反省せしめて、その人を眞實の生活に歸すべく、あらゆる努力を以て之につとむるのだ。だから、そこには諸君のいたらない多くの欠点を述べねばならない、そして、それに向つて全心の反省と全心の改造とを願はざるを得ないのだ。従つて私の話を聞けば、少くともそこには諸君の生活が、時代の生活に逆行してゐる点を見ざらんとするも見ざるを得ないものがある。そしてそれが見えれば見えるほどそこには自分の不完全なところが判る。而て自分の現在が今のまゝでは居られない、そこには常に改善の必要が見えるの

だ。従つて、自分の生活がこのまゝでは喜べない。そこに理想と現實の衝突がある。だから私の話を聞いて未だ改善の心の起らない人々には私の話がいつも吐られてのみゐるやうに聞えるのだ。

二

然し諸君が私の話を聞いて喜べないのも無理がない。そしてそれを以つて私は諸君をのゝしろうとするものではない。何となればそれが今日多くの舊き頭の人々の實際生活であるからだ。乍然それだからと云つて、私は諸君が今日のまゝであつてよいとは思はない、それはいかに諸君も、昔のまゝでよいと云ふ解はないからだ。そこにはやつぱり自己の到らざるを反省し、眞に自らの爲すべき道に生るのが、それが人生の眞意義であるからである。之私がつたとい一時は諸君の心に逆つても、つとめて諸君の深き反省を求めて止まぬところである。さうして、見よ、私共の道友の中に、かうした意味に於ける眞の改善者がいかに多いかを、未だ私共の道友は眞に完全なりと云ふほどのものは一人もないかも知れぬ。乍然その不完全なる中からも、いかに完全に進まんとして自ら努力いたせるかは吾人の等しく認めて止まぬところである。従つて私たちの喜びは決して今日のやうな生活を之で以つてよいなき、遊んで暮さうとするものはない。

誤りである。

友よ、諸君は今一度靜に私の此の話を反省して深く考へて見るべきではないか。

三

此の意味からして、諸君が考へてゐられるやうな話は私共からすればそれは仕上ごころか、まだ眞の荒削りにさへなつてゐないのである。

そしてまた、諸君は私の話を荒削りの話だと云はれたと云ふが、若しそれなればそれは正しい意味に於て當つてゐる。そして、それはまた今日のところ私共にはその荒削りでたくさんなんだ。否その荒削りでなくてはならないのだ。何となれば今日の私達はまだ仕上をするには早過ぎるからである。そうして、それはまた正しく、眞に荒削りの必要な時代であるからだ。だから今日の私共にはその荒削りでたくさんではないか。

乍然、友よ、私が今一應諸君に御尋ねしておかねばならないことは一体佛教に於ける仕上とはどんなことであらうかと云ふことである。それは少くとも佛教の荒削りがどんなものか判つておらねばならないが、私の考へでは諸君は未だその佛教の荒削りさへ判つてゐないのだ。それなのに諸君がごうして仕上なきの話が判るものか、少くともそれは諸君が〇〇上人の御話を以つて仕上

そしてまた、多くの人々が終日働いてさへ食へぬのに、自分一人が終日遊んで食べるのを、之を如來の恵みだなきと喜んでゐるものはない。否、それごころか、さう云ふことはむしろ我道友は恥てゐる。又多くのさうした貧困の人々に對して相すまぬとさへ感じてゐる。従てさうした生活には寧ろ日夜にたへせぬ懺悔の心さへがつづくのだ。而てしかもその中から如來の大悲にあこがれて、我にさうした怠けの生活のないやうに、あらゆる人々の幸福の爲めに我も亦眞に立つことのできるやう、心から願つて止まぬものである。さうして、若し私共に眞に幸福を感じ、眞に喜びを感じるものがあるならばそれは寧ろかうした願ひに自らが立ちうるやうになつたこと。そしてかうした生活に少しでも自ら進まうとすることのできる自分の生活についてである。

だから若しも私共に少しでも眞に喜ばうとするものがあるならばそれはむしろ、あゝした〇〇上人のやうな有閑生活の話に共鳴することのできないのを喜ぶのだ。さうしてまた、あゝした話に共鳴して、自分の生活の改善をも知らず、多くの人々の困窮をも察しない、さうした生活の人々のやうにあり得ないことを喜ぶのだ。

して見ると諸君が今日私の話を荒削りの話として、〇〇上人の話を仕上の話だと思つてゐるのはそれは大なる

の話だなきと云つてゐる点から見てもそれは明かだ。

ところで佛教の眞髓は覺佛の体現だ。佛教の理想は成佛だ。而もその爲めには一切の生命を屠して止まぬのが本當だ。然に諸君は果してその覺悟があるか。私はそれを衷心から案じてゐる。然に諸君はその眞に生きよと云ふ人を反つて罵しらうとさへするのでないか。さうして、諸君は自らの生活の改善をつとめずして、たゞそのまゝに許されて、獨りで私利私慾とを貪ほるの話を樂まうとするのではないか。それが私の大いに心配に堪えぬところである。

斯く云へばとて、私が完全であると云ふのではない。そしてまた、私自身が常に他の人に劣らず向上もし、發達もしてゐると云ふのではない。乍然それだからと云つて、諸君がそこに何等の向上もなく發展もなくしてよいと云ふ道理がどこにあらうか。世の多くの人々とはともすれば私の話を聞き違がへ、私一人がいゝ氣で言つてゐるかと思ふ、乍然若しも私の話を眞に心して聞いて頂くならば諸君は必ずそこに限りなき如來の慈光を覺え、而もそこには又限りなき吾人の向上と發展の一路とが極もなく輝いてゐるのを見ることが出来るであらう。

友よかくいへばとて、私は諸君の生活を決して攻めるものではない。それはたゞ諸君と共に眞に生きんが爲め

に他ならぬ。それは私にも諸君に劣らぬあさましき心の生活のあることを知るからである。否それどころか、むしろ、私自身の中にあるそのあさましき心の方が諸君にも数倍するかも知れぬ。乍然私はそれと共に甚だ失禮かも知れないが私と同く諸君の心の中にもこのあさましき心のあることも知つてゐる。乍然友よ、私はそれと同時にそれにもまして、私共の心には更に神人の生活、佛陀の生活をあこがれて止まない佛性のあることを感じて止まない。さうして之は私の或る時代までは感じなかつたものである。乍然今からして之を考へればそれはたゞ私共が自らにそれを自覺しなかつたまでのものであつて、初めからそれがなかつたと云ふのではない、たゞそれは私共がそれに氣づかなかつたものに外ならぬ。然に世間の人々は多くはそれを知らぬのだ。そしてそれは恰も私の昔のまゝのそのやうだの私が聲をからし身をつくして多くの人々に此の道を叫んで止まぬところである。之が私主として吾人の生活を高調して成佛の理想を説き、常に今日の生活を反省して其の生活のいたらざるを改善せんとする所以である。

四

乍然 友よ、私はたゞ徒に成佛の理想を説き、又徒に自己の罪惡を適撥して、それを以つて能事終れりとなす

ものではない。そこにいかにして、此の自己の罪障を消滅し、我等の究竟する成佛の域に到るかを常に心して止まぬ者である。

而て、それには此の覺悟を以つて、宇宙唯一の絶對の如來を信じ、その本願に乗じて念佛するを以つて最上の法とする。之が私に諸君に念佛を勧むる所以である。

乍然その念佛は何の爲めの念佛であるか、それはひとへに往生の爲めの念佛であると同時に、又それが直に成佛の爲めの念佛である。而て往生の念佛とは果していかなる念佛であらうか、また成佛の生活とは果していかなる人間の生活であらうか。

友よ、往生とは單なる死のことではなくして、如來の淨土へ生れることである位は諸君も已に度々之を聞くところである。乍然諸君の度々聞くところの淨土と云ふものがともすれば諸君にはそれがそのまゝ正しく解せられずして多くは誤まつて解せられてゐるところが多いのだ。そしてまた、成佛と云ふことも、その言葉としては成佛に誤りはないが、その成佛の意義に於て、多くは眞に誤られてゐるのである。而もそれが多くの場合今日の既成佛教の大部分が已にさうでないかとさへ私には思はれてならぬのだ。之がさうしても叫ばなければならぬところである。

だから私の話は宗教の革命だ、人心の改造だ、そしてあらゆる一切の人類が共に眞に生きるべく、相提携して、自他平等に眞實の世界へ進むの生活だ。従つて自分獨りで楽しむの宗教でなく、又自分さへよければ人はさうでもよいと云ふやうな生活ではない。そこには自他共に眞に生きるべく、その生活の改造が第一だ。話は話のみにて終るべきものではない、そこには話の意味がある。そして、その話の意味はその話の意味の如くに私共

が眞に改まつて行くの意味でなくてはならぬのだ。

それには先づ佛敎の大義をのみこむことだ、そしてその大義が私共の生活になるやうにつとむることだ、さうして、それには大まかな生活がよい、いはゞ、荒削りの生活だ。世にも大器晩成だと云ふではないか。

乍然それだから怠けてよいと云ふことではない、いはゞ氣をあせらぬことだ、そしてなまけずに常に精進して眞實の生活にいそむことだ。(四、七、二夕)

吾朋便り

□土屋觀道

道友の皆様には御變りもありませんが、近頃の暑さ、御變りもないかと御案じ申て居ります。次に私共一家には皆無事で居ります。近頃でない一家の健康、之も如來の慈光が喜んで居ります。長女的美智子も病氣前よりも反て丈夫となりました。次女の良子にもさより丈夫ですが末子の光道も非常に達者で居ります。

□私の勉強は仲々思ふやうにはかどりませんが、それにしても、近頃は全く二階

の一室に入りびたりです。身心共に喜びの中に靜に讀書に日夜を暮して居りますから乍他事御休神のほどを御願ひ申ます

□然しこゝに一二の悲しいことを御報告せればなりませんが、永年お世話になつて居りました、唐澤の阿彌陀寺老上人が此の春御他界をされたのさ、その御弟子の宮澤就忍上人が之また御病氣で先月の二十六日に御他界になつたことです。之は特に唐澤の三昧會に列せられた道友の方々に御一報申すと共にこゝに誌上を通して一同謹んで吊詞をさしける次第であります。

□大阪の生玉の月江寺の御先住が先月や

つぱり御他界になりました。之また道友の方々に御一報申上ます。老師は私共道友の殊に大阪眞生同盟の方々が常にお世話になつてゐた寺の先住であられましたけれどから非常な堅い念佛の先達であらせられたが、殊に最近病床の中でも一層稱名念佛の道業の師であらせられたと云ふことであります。

□次に今年の唐澤三昧會についてありますが、今年は一層しつくりと念佛中心の集りにしやうではありませんか。先月號に中村上人からも御願ひがありましたやうに、年に一二度の三昧會のことですからそれこそ眞にやうと思へばごん

こそでも眞剣にやらうと思へばやれぬことはないかと思ひます。乍然それかと思つてやつぱり御話の方も聞かないでは一般的には念佛が進みかれるかと思ふから今手もやつぱり念佛に關するお話はいたしたいと思ひます。

□けれども今年はいつものに比してより以上に念佛中心にしつくり之をやつて見たいと思ふのでありますから道友の方々にそのおありで御集りのほごな御願ひ申します。

□尙今年に唐澤の寺の方では全く無住だとのことで、例年のやうに御世話をお願いの方がありませんので、目下正願寺様の御靈力を願ひ、上諏訪の山田、安藤、藤森の御三方其他諏訪の道友の方々に主として御世話をお願い申しますから之また御承知のほどをお願い申します。かうしたときお互に持つべきものは道友なるかなと心から喜びに堪えません。

□尙先月東京の道友竹内喜太郎氏の御令室が御他界になつたとの報を得ました。私の永い間の道友であります。其の他の道友の知己の方々に御知らせ申上ります。

□尙、先月の一日は久々で東京の道友の集りをいたしました。可なり多くの集りで非常の喜びです。神谷善之進、谷口年泰の御兩氏や大橋俊高さんなんかの集りも見えました。夜になつてから、近頃越後から來て米屋をして居られる佐藤益章さんなども見えしました。あの大きな田舎の地主さんから、今日の平民的米屋さんにわざとなられた佐藤さんの態度こそ、私共尊い姿と拜んでゐます。色々の經驗談を聞かされて、大いに得るところがありました。

誌代寄贈御芳名

- 壹圓也 藤枝町神尾承眞様、東京川口喜代次様、名古屋前田信次郎様
- 壹圓五拾錢也 東京横井三郎様、京都三輪海一様
- 貳圓也 東京荒川次郎様
- 五圓也 吳市片岡憲三様、尼ヶ崎内藤政次様

唐澤念佛三昧會

の廣告八頁にあり

價定誌本

一部 金十錢 郵税共
中年 金六十錢 全
一ヶ年 金一圓 全

註文の注意

- 購讀希望者は代金を添へて御申込下さい
- 誌代は總て前金御拂込の事
- 送金は振替によるのが便利
です

昭和四年七月十日印刷納本
昭和四年七月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

編輯兼 土屋 觀道
發行人

名古屋市西區隅田町二一番地
印刷所 百々治之助
電話四(五)二九三番

名古屋市東區鍋屋町二丁目
印刷所 笠田山田活版印刷所
電話東(四)三六・七五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞・生・社

振替口座東京四七二八八番